

Title	浅井了意の自筆一覧
Sub Title	The list of Asai Ryoi's handwritten
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2024
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.127, (2024. 12) ,p.1 (230)- 7 (224)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01270001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

浅井了意の自筆一覽

石川 透

一 はじめに

浅井了意が、いわゆる仮名草子作品を量産する前、あるいは、その量産とほぼ同じ頃に、奈良絵本・絵巻等の豪華写本類の筆耕をおこなっていたことは、拙著『奈良絵本・絵巻の生成』（三弥井書店、二〇〇三年）『奈良絵本・絵巻の展開』（三弥井書店、二〇〇九年）等に記した通りである。

これは、それまでに多くの人物が研究を積み重ねてきた自筆版下とされる浅井了意の筆跡と、奈良絵本・絵巻類の一部の筆跡が一致しているということが契機となっていた。私が二〇〇〇年五月に中世文学会においてこの研究を発表すると、浅井了意の平仮名文の自筆資料が二つ見つかり、この説は動かぬものとなった。と同時に、一部の研究者が疑っていた浅井了意作品における自筆版下という考えも、間違いないものとなったのである。

ただし、自筆版下については、多くの指摘がされていたが、あらためて検証すると、細かいところではかなり間違いがあったり、重要な点が指摘されていなかったり、という状況であった。

二、『狗はりこ』の問題

版本における浅井了意の自筆版下という考えは、元禄五年（一六九二年）に刊行された『狗はりこ』の、林義端による序文の記述が元になっている。それによれば、この『狗はりこ』を、遺作として浅井了意の筆跡のまま刊行する、というのである。普通ならば、作家によって創作された草稿は、文字のうまい筆耕によって清書されて版下になるのであるが、この場合は、草稿のまま版下にしたか、了意自身が清書したものを版下にしたということになる。

いくら著述にたけた人間であっても、いきなり版下に創作文を書くのは難しいであろう。そこで、『狗はりこ』の筆跡を調べると、林義端の序文と巻七のみが別筆で、了意の序文と巻一から巻六までが同筆であることが分かる。林義端は細かなことを書いていないが、この状況から、以下のことが読み取れる。

まず、元禄四年（一六九一年）正月までに、了意は、『狗はりこ』の自身の序文と巻一から巻七までの草稿を完成させ、さらには、自身の序文と巻一から巻六までの清書の執筆を終えていた。ところが、元禄四年正月には、了意は亡くなってしまった。出版書肆からすれば、あと巻七の清書で刊行できる状態であったと思われる。そこで、林義端は、この出版経緯を序文としておおまかに記し、その義端の序文と巻七を別の筆耕に清書させて出版した、ということである。

了意が清書をしていたのが、巻七の途中までであったかどうかは分からないが、巻七がそれまでの筆跡と異なるのはこのためであると考えられる。ともかくも、この『狗はりこ』の義端の記述によって、浅井了意は創作した作品を自ら清書していた、という自筆版下の作品が指摘されるようになったのである。

三、自筆版下の問題

こうして、江戸時代から、浅井了意の自筆版下の作品が指摘されてきた。委細は間違っていることもあるが、基本的には、私が研究を開始する前には、浅井了意が創作した作品のうち、十四点が自筆版下であると指摘されていた。ここで問題

なのが、これまで『狗はりこ』と同筆と指摘されてきた作品が、全て十七世紀後半の作品であり、内容的にも浅井了意が創作した、と考えられるものであったことである。

『狗はりこ』の林義端の序文を疑ったり、その後の了意の自筆版下ということ自体を疑う研究者は、存在していた。しかし、『狗はりこ』の巻一から巻六までの筆跡は、とうぜん、筆耕の文字なのであるが、この筆跡が、浅井了意作と考えられる作品にしか登場しないのは、きわめて不自然なことである。筆耕は、清書をする職人なのであるから、了意作の作品だけを選ぶことはできないはずである。となると、この筆跡は、了意以外が創作した作品にも、版下として出てくるはずなのであるが、これまでのところ、そのような指摘はないし、私も見つけてはいない。

既に指摘されていた十四点の自筆版下以外では、私が、明暦元年（一六五五年）刊の『難波物語』と、寛文十二年（一六七二年）刊の『密厳上人行状記』（三巻のうち序文のみ）を追加したのだが、いずれも、内容から浅井了意作との説があるものであった。

今後さらに『狗はりこ』巻一から巻六と同筆の作品が見つかる可能性はあるが、やはり、この筆跡は、浅井了意作と考えられる作品にばかり登場する文字ということになる。となると、その筆者は、浅井了意自身か、その周辺にいた人物の筆跡ということになるが、林義端が嘘をつく必要もないであろうから、これらの筆跡は、浅井了意自身の筆跡であるということになる。

このように浅井了意は、筆耕もこなせた人物ということになる。ここまでは、あくまでも版本に残された筆跡の問題であった。少し補うと、版本の筆跡というのは、彫師が版木を彫った筆跡であり、筆跡鑑定に使えるのか、といった疑問が出てくる。何を隠そう、私自身も長い間そう考えており、版本の筆跡についてはあまり考えずにいた。しかし、彫師の業は、十八世紀後半以降の浮世絵の彫師と同じく、その百年前の彫師の実力も相当なものであることが分かり、十七世紀の作品であっても、版本も十分に筆跡研究ができると考えるようになった。

四、奈良絵本・絵巻類の筆跡

奈良絵本・絵巻類は、主に十七世紀に制作された豪華な写本の一種である。主に大名家に購入された作品群であるが、その一部の筆跡に浅井了意の自筆版下と同筆のものが存在したのである。詳しくは、前掲拙著を参照していただきたいが、自筆版下は、作家が筆耕の力量を有していないと作れないのである。その浅井了意と思われる筆跡は、他人が創作した作品の版本では見つからないが、豪華写本類に出てきた、ということになる。

しかも、奈良絵本・絵巻には、基本的に署名は存在しないので、これまで奈良絵本・絵巻には署名が見つからないのだが、絵の存在しない豪華な写本に、了意、あるいは、了意と考えられる人物の署名が出てきたのである。特に、明暦元年（一六五五年）の「洛下野父羊岐斎幸庵処士」の奥書を有する『源平盛衰記』は、重要である。この頃はまだ了意とは名乗っておらず、羊岐斎という号は、了意作である『伊勢物語抒海』に使用された号と一致している。『伊勢物語抒海』は承応四年（一六五五年）に刊行されているので、『源平盛衰記』を写したのと同じ年に、同じ号が使われていることになる。羊岐斎という珍しい号がほぼ同時期に使用されている、ということは、『源平盛衰記』は、浅井了意の筆跡ということになる。『源平盛衰記』は中世には成立していた作品であるから、了意は、筆耕として書写していることになる。この『源平盛衰記』の写本は、体裁は半紙縦型の奈良絵本と同じであるので、奈良絵本と同じように、大名家が注文し購入したものと考えられる。目録を含めて四十九帖の作品であるので、今後は、浅井了意の平仮名の筆跡の基本資料となると考えている。

同じような作品としては、『源平盛衰記』と同類の大作『太平記』も写しているが、残念ながらこの写本は、現在行方不明である。

こうして見ると、浅井了意の筆跡は、版本においては、自分で創作した作品に見られるが、奈良絵本・絵巻を含む写本類は、既に古くから存在していた作品が見られることから、写本類は、純粹な筆耕として制作していた、とも考えられる。

しかし、了意が本文を記した奈良絵本・絵巻を見ていくと、珍しい作品も目につくのである。しかも、漢籍や怪異譚等、了意が創作を得意とした作品も多く存在しているのである。先述したように、了意は、自分で内容を創作し、全てではない

のであるが、自分で版下を清書していた。もし、自分で創作したものを絵巻の形に清書してくれと依頼されれば、それは、簡単なことのはずである。

ということ、了意が清書している奈良絵本・絵巻の中には、了意自身が内容を創作した作品も存在するのではないか、というのが現在の一番の関心事である。しかし、筆跡は、誰のものと言うのは比較的容易なのだが、その内容を誰が創作したかについては、簡単に結論が出る話ではない。

五、おわりに

以上のようなことを考える上でも、浅井了意の自筆の資料を発見し、分類することは、きわめて重要なことである。浅井了意が、筆耕をしていたこと、仮名草子最大の作家といわれる人物がどのような仕事をしていたかが分かってきたのである。もちろん、この時代は、作家が創作だけで、すなわち作家の仕事だけで生活できた時代ではない。稿料作家が確立したのは、百五十年ほど後の曲亭馬琴からだと言われている。

作家がいかにして作家となったかはほとんど不明であったのである。浅井了意は、これまでの数多くの研究者が指摘しているように、異常なほどの多作家として知られ、時によっては、浅井了意は二人いた、との説もあった。その内容は、さまざまな文献からの引用が多いので、今日の創作とは、少し様子が異なっているが、物語・説話系の作品だけではなく、漢籍や仏書を含めれば、膨大な量を創作していたのである。

これらをどのように制作していたかを考える上でも、あるいは、了意作と確実に言える作品を見出す上でも、浅井了意の自筆の資料を、まずは整理する必要があるのである。

次頁から始まる一覧は、浅井了意の筆跡を有する作品の一覧の最新版である。残念ながら、このような一覧に完璧なものは存在しない。今後も補う必要があることを記して、本稿を閉じたい。

自筆資料

石川透『源平盛衰記』四九帖「明暦元」「洛下野父羊岐斎幸庵処士」
所在不明『太平記』四二帖
広島大学国文学研究室『古今和歌集』二帖
聖徳寺『赤梅檀弥陀の尊形一軀造立の縁起』一軸「寛文九」「洛下本性寺照
儀坊釈了意」
聖徳寺『七宝縁起』一軸
聖徳寺『濃州大浦邑聖徳寺系譜』一軸（真名文）
聖徳寺『小笠原家系図』一軸（部分）（真名文）
叡山文庫『天台三大部奉納願書』二丁（真名文）
四天王寺『太上感應編』一冊（真名文）「延宝二」「本性寺昭儀坊沙門釈了意」

大型絵巻物

大阪大谷大学図書館『俵藤太』三軸
和洋女子大学図書館『田村』三軸
海の見える杜美術館『義経都話』二軸
思文閣古書資料目録第一六四号『八まんの本地』残欠一軸
思文閣古書資料目録第一四〇号『十番切』二軸
町田市立博物館『たはらかさね耕作絵巻』二軸
古代出雲歴史博物館『大黒舞』二軸
もりおか歴史文化館『大黒舞』二軸
國學院大學図書館『武家繁昌』二軸
石川透『蓬萊山』二軸
石川透『酒吞童子』残欠一軸
石川透『若みどり』一軸（挿絵欠）
石川透『子易物語』一軸（下のみ）
石川透『咸陽宮』二軸（現断簡摘）
石川透『十二類鶏犬絵巻』二軸
ロシア古文書館『長恨歌』断簡二枚
上野学園日本音楽資料室『琵琶の由来』一軸

特大縦型奈良絵本

佐々木信綱旧蔵『七夕』一冊（上のみ）

半紙縦型奈良絵本

神奈川県立歴史博物館『平家物語』二四帖（六帖のみ）

特大横型奈良絵本

チェスタービーティ図書館『義経地獄破り』二冊

一枚物

石川透『虫歌合せ』六枚

版本・自筆版下

『難波物語』	一巻	明暦元年刊
『三綱行実図（平仮名本）』	九巻	
『因果物語（平仮名本）』	六巻	
『やうきひ物語』	三巻	
『可笑記評判』	十巻	万治三年刊
『浮世物語』	五巻	
『かなめ石』	三巻	
『東海道名所記』	六巻（巻四～六）	
『江戸名所記』	七巻	寛文二年刊
『京雀』	七巻	寛文五年刊
『新撰御ひながた』	一巻（序文のみ）	寛文六年刊
『密厳上人行状記』	三巻（序文のみ）	寛文一二年刊
『鬼理至端破却論伝』	三巻	
『勸進念仏集』	一巻	貞享五年跋
『父母恩重経和談抄』	六巻（序文のみ）	元禄二年刊
『狗張子』	七巻（了意序・巻一～六）	元禄五年刊